

シンポジウム4

九州ブロック血液センターの医療機関との関わりについて

石田忠三(日本赤十字社九州ブロック血液センター)

九州ブロックでは全国に先駆けて業務集約をとり進めてきたこともあり、医療機関との関係構築に取り組んできた。安全な血液を安定的に患者へ届けるためには、献血から輸血にいたる一連の血液事業の流れの中で、すべてのプロセスの担当者が全体を把握して自分の立ち位置と果たすべき役割を理解し、有機的に連携を図っていくことが大切である。医療従事者もその一員であり、献血者の善意と患者の笑顔を結ぶためには、医療機関での安全で適正な輸血が実施される必要がある。このプロセスに対する支援も血液センターの重要な役割と位置付け、九州ブロック血液センターでは医療機関との関わりを重視してきた。

1. 輸血シンポジウムin九州

輸血医療と血液事業に関する最新情報を提供し、ことに危機管理の観点からの意見交換と情報共有の場を設けている。多くの職種の方に参加いただくため、プログラムの編成にあたり輸血医療に携わる全職種の演者に多職種連携の観点から講演いただすこと、現場の業務に直結した身近な内容とすることを方針としている。また、参加を促すためにパンフレットに解りやすい講演要旨をつけている。さらに、アンケートによりいただいた意見等へは真摯な対応をとるとともに、講演集に可能な限り回答を掲載することとしている。その結果、当ブロック血液センター主催になった2012年以降、毎回650名から900名の参加をいただいており、多くの医療機関の担当者を対象とした情報発信と意見収集ができている。

2. 日赤輸血検査研修会

ブロック内各血液センターは医療機関等の輸血担当者を対象に輸血検査研修会を実施している。ブロック血液センターは技術的・学術的支援を行い、医療機関の輸血検査レベルの向上と維持のため、各血液センターにて持続可能な実施体制の構

築を図っている。この研修会は2011年の福岡県赤十字血液センターを皮切りに、現在は九州ブロック全血液センターで実施されようになった。

しかし、持続可能な実施体制には人材が必要であること、また、個々の医療機関における輸血検査体制等に対し、血液センターの立場での介入に限界がある等の問題点もある。現在、医薬情報担当者を中心としたセンター職員の育成や、県技師会等との連携による問題解決を図っている。

3. 九州各県合同輸血療法委員会関係者会

本会は3年の準備期間の後、2016年に設立された。九州各県の合同輸血療法委員会の代表世話人、薬務行政主管課長(室長)、血液センターおよびブロック血液センター所長を主構成員とする。目的は各県活動の情報共有と意見交換をとおし活動の活性化を図ることにより輸血療法の向上に資することである。

その結果、共通の課題として、(ア)輸血学会の使用実態調査の回収率向上、(イ)中小医療機関の輸血医療向上、(ウ)ブロック統一の自己血の使用実態調査、(エ)災害時の輸血医療体制の構築および(オ)EBMのためのデータベースの作成の5項目が提案された。現在、(イ)および(エ)については課題の洗い出しと対策の立案がなされている。

この会の特徴は、ブロック内の各県合同輸血療法委員会の世話人が行政を含めて一堂に会することであり全国的にも例を見ない。この会へは使用適正化方策の進化を期待するが、適正使用推進による使用動向の変動は需要に合致した供給の面でも重要である。したがって、原料血液確保計画に関与する行政の参画は意義があるといえる。また、広域的な災害時の輸血医療体制における組織間連携についても各県の行政抜きで論じることはできない。

この会が現在の情報共有の場から活動共有の場へと成長するためには多くの課題もあり、各県の

合同輸血療法委員会の理解とさらなる連携が必要である。

4. 医学生・研修医を対象とした血液事業にかかる研修

日本赤十字社の実施する血液事業に対する理解を促し適切な輸血医療を意識付けるため、医学生および研修医を対象とした研修を継続的に受け入れている。この研修をとおして、献血者の奉仕の心を患者の笑顔に繋げるためには、医療機関での安全で適正な輸血が大切であり、そのためには血液センターとの連携が重要であるとの認識が深まっている。

5. 日臨技九州支部会での血液事業紹介のためのブース出展および献血バス配車

この事業は臨床検査技師の学会で九州ブロックの事業を主に紹介して血液事業への理解を求め、より良い協力体制の構築を図ることを目的としている。本年度は熊本地震が発生したこともあり、血液センターの対応について動画で紹介した。毎回、来場者へアンケート調査への協力をお願いし、日頃の輸血業務についての問題点や血液センター

に対する意見を伺っている。なお、献血受入については1台配車で60から100名以上の実績があり、医療従事者の意識の高さが伺える。

このような活動を契機に、次年度の日臨技九州支部会で予定されている災害時の検査体制のシンポジウムでの血液センターからの演題発表を依頼された。また、臨床検査技師関連の大学関係者から、学生の血液事業研修としてブロック血液センター見学とルームでの献血体験の提案を受けるなど、展示による血液事業広報の効果も確認されている。

今回報告した九州ブロック血液センターと地域血液センターが連携して行っている活動により、医療従事者や行政関係者への血液事業の理解は深まりつつある。医療機関からの意見に対して一つ一つ検討し、必要に応じて対応することは大切であり現在も行っている。しかし、得られた情報の共有、解析、問題点の洗い出し等を行い、さらに根本的な問題を血液事業の改善につなげることも重要である。そのシステムを機能させることができることで九州ブロック血液センターと医療機関との関係における大きな課題の一つである。

また、医療機関に改善の余地を認識する機会も

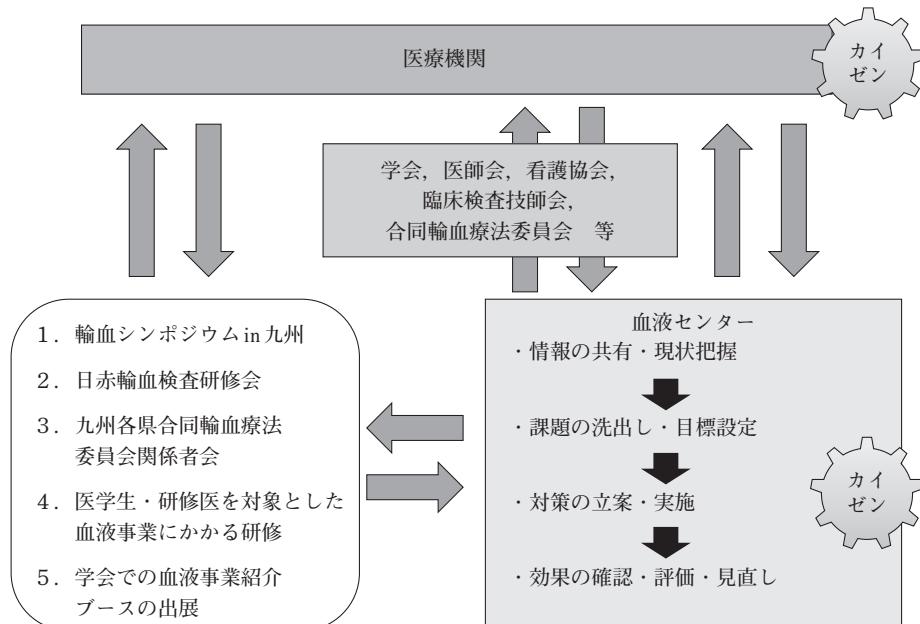


図1 九州ブロックの血液センターと医療機関の関わりの概要

あるが、医療機関の体制に対して血液センターがどこまで介入できるのかという問題がある。これについては、マンパワーと立場論の二つの観点から議論されるべきである。マンパワー不足については今回報告したようなブロック単位での活動による効率性の向上が対策の一つであると考えている。また、立場論については、輸血・細胞治療学会、医師会、看護協会、臨床検査技師会および各県の合同輸血療法委員会等との連携が大きなカギとな

るといえる。

今後、血液センターと医療機関との関わりにおいては、ブロック単位での協力体制が重要であり、それによる効率性の向上と新たな次元での関係構築に繋がることが期待される。今回報告したさまざまな活動をとおして血液事業の改善と共に医療機関とのコミュニケーション向上を図り、外部の諸団体との相互理解を深めることでさらなる連携強化に努めていきたい。